

【発表概要】

2024年 国際アルツハイマー・パーキンソン病学会 (AD/PD™ 2024 International Conference on Alzheimer's and Parkinson's Diseases)

## 日本人コホート(SESSA)におけるアルツハイマー病関連血液バイオマーカーの 年齢依存性

発表者	石木 健吾 <sup>1</sup> , 近藤 慶子 <sup>2</sup> , 中野 将希 <sup>3</sup> , 三ツ石 弥千代 <sup>3</sup> , 門田 文 <sup>2</sup> , 渡部 俊介 <sup>1</sup> , 山下 和人 <sup>1</sup> , 三浦 雅央 <sup>1</sup> , 岩永 茂樹 <sup>1</sup> , 佐藤 利幸 <sup>1</sup> , 上島 弘嗣 <sup>2</sup> , 西村 正樹 <sup>3</sup> , 三浦 克之 <sup>2</sup>  <sup>1</sup> シスメックス株式会社 中央研究所 <sup>2</sup> 滋賀医科大学 NCD 疫学研究センター <sup>3</sup> 滋賀医科大学 神経難病研究センター
発表概要	<b>背景</b> 血液バイオマーカーを用いたアルツハイマー病診断は、臨床現場における有望な手法の1つとして期待されている。しかし、これらのバイオマーカー値は様々な要因によって変動する可能性があり、中でも加齢は最も代表的な影響因子の一つである。したがって、年齢とバイオマーカー値の関連を明らかにすることが重要である。我々は以前、日本人の一般男性コホートにおいて、血漿中のアミロイドβ40 (Aβ40)、Aβ42、Aβ42/40の年齢依存性を評価した。その結果、血漿Aβ値は加齢に伴い有意に上昇し、Aβ42/40は逆の傾向を示した。本研究では、同一コホートにおける血漿リン酸化タウ181 (p-tau181)、tau、ニューロフィラメント軽鎖 (NfL) と年齢との関連を評価した。  <b>方法</b> 滋賀動脈硬化疫学研究のフォローアップ追跡調査 (SESSA II) に参加した46~83歳の日本人男性845人の血漿 p-tau181、tau および NfL は全自動免疫測定装置 HISCL™-5000 で測定した。年齢との関連を評価するために、参加者を10歳ごとの5つの年齢群に分け、各バイオマーカーと年齢との関連について Kruskal-Wallis 検定を用いて評価した。

	<p><b>結果</b></p> <p>p-tau181、tau、NfL の平均値±標準偏差（単位：pg/mL）は、それぞれ 1.44±1.08、22.87±10.03、52.39±80.00 であった。また、p-tau181、tau、NfL の中央値は年齢群間で有意な差が認められ、年齢と正の関連を示した（<math>p &lt; 0.001</math>）。</p> <p><b>結論</b></p> <p>本研究では、一般日本人男性における血漿 p-tau181、tau、NfL 濃度と年齢との関連を明らかにした。これは、以前に研究された A<math>\beta</math>42 および A<math>\beta</math>40 の差異と同様であった。年齢依存性の度合は各バイオマーカーにより大きく異なるため、影響が大きいバイオマーカーについては、年齢別の基準値が必要となる可能性がある。</p>
セッション	On-Demand Oral, VIRTUAL ORAL: THEME A (VO046 / #2860)